

現代日本語における視点制約に関する定量的研究

論文要旨

言語学の世界において、視点に関する研究が盛んに行われてきた。その中で最も注目される項目の1つに、久野（1978）の視点制約理論がある。これは、話し手は自分自身、または自分自身に近いと考える人物（以下：ウチ）の視点を取る際に、ウチを文の主語に位置づけなければならないという制約のことである。この理論は、日本語学、日本語教育学などの分野で頻繁に取り上げられるが、その妥当性の検証はまだ十分になされていない。またこれは、汎言語的に適応するとされるが、英語、中国語などの言語には当てはまらないという見解も散見される。本研究はこうした問題点に基づき、視点制約理論の妥当性と言語普遍性を定量的に検証する。

本研究の構成は以下の通りである。

第1部：視点および視点制約をめぐる諸議論（序章、第2章、第3章）

第1部は序章、第2章、第3章からなる。視点および視点制約という概念に関する先行研究と、現に存在する問題点を提示し、本研究の立場と位置づけを明らかにした。

序章ではまず、本研究の研究動機、問題意識および各章の内容を概括的に俯瞰した。2章は、最初に日本語の視点を論じた大江（1975）と久野（1978）に触れ、視点とはどのようなものかを紹介したあと、視点および視点制約という2つの概念を用いて説明された文法項目を整理した。次に日本語教育学における視点習得の研究に目を向け、日本語教育の現場で、視点という概念がどのように日本語学習者に理解されているのか、またどのように教授されているのかを列挙した。最後は、視点制約理論の日本語、英語、中国語における妥当性を取り上げたものを紹介した。

3章は、まず本研究が久野（1978）に従い、視点を立場、すなわち「自己同一視化」（Identification）と考える立場をとることを示した。そして、先行研究の問題点を示したうえで、視点制約理論の妥当性に関する2つのリサーチクエスチョンを立てた。さらに、その達成のために、視点制約理論が働くと考えられる3つの場面を、考察の対象として設定した。

具体的には、先行研究には、問題点が2つある。1つは、視点習得関連の研究では、漫画描写（口頭、筆記）において、日本語学習者と日本語母語話者の語り、または作文において、主語が漫画の主人公に統一されていないことや、授受表現の誤用などが見られるため、両者の間に視点のズレがあるという主張が頻繁になされてきた。しかし、一部の研究では、日本語母語話者にも主語を統一しない現象が観察され、日本語でも本当に視点制約理論が働いているのかどうかという問題点が浮上してきた。2つ目は、久野（1978）の視点制約理論は言語普遍性を持つとされたが、英語、中国語などに適応しないという意見が出ている。その

ため、当理論に言語普遍性は本当にあるのかどうかという疑問も出てきた。これらの問題点を受けて、以下の2つのリサーチクエストionsを掲げた。

a) 視点制約理論は日本語においてどのくらいの妥当性を持っているのか。

b) 視点制約理論は果たして言語普遍性を持っているのか。

この2つを解決するために、視点制約理論があると想定できる場面、すなわちウチとウチでないほうが同じ事態に関与する際に、視点が必然的にウチに寄る場面を3つ提案した。書き言葉では自国と他国のスポーツ試合の記事と、完全に登場人物に同化すると思われる小説、話し言葉では自分自身に起こった出来事を語るか、他人に伝えるという場面を設けた。

第2部：視点制約理論の妥当性および言語普遍性に関する検証（4、5、6章）

第2部は3章で設定した3つの場面について、視点制約理論の妥当性および言語普遍性について定量的に検証した。

4章は、書き言葉のスポーツ記事に焦点を当て、リサーチクエストionsの(b)を兼ねて、日本語と中国語との比較を通して、視点制約理論の日本語と中国語の書き言葉における妥当性と言語普遍性を同時に考察した。自国対他国の試合を描写した日本語と中国語のスポーツ記事をそれぞれ50本取り上げ、試合の描写においてどちらのチームが主語になるのかを調べた。その結果、日本語の記事は能動文と受動文の両方とも日本チームを主語にした文が圧倒的に多かった。一方、中国語記事では、相手国を主語にした能動文と受動文は各自一定の割合で観察された。このことから、スポーツ記事では、視点制約理論が基本的に日本語には適応するが、中国語にはさほど適応しないという結論が得られた。したがって、久野(1978)が主張している視点制約理論の言語普遍性が成り立たなくなると言えた。また、日本語記事では、相手チームを主語にした受動文は観察されなかったが、能動文が全体の約10%を占めていることから、視点制約理論が常に守られているわけではないこともわかった。これについては、試合の勝者、名選手・名チームなど一般大衆が関心を持つ対象が文の主語になりやすいことや、臨場感を出すための記事描写のレトリックなどの理由が考えられた。

一方、中国語では、張(2001)の分析にあるように、ウチとウチでないほうの間に視点のランキングが存在しないことが挙げられている。この点は日本語と大いに異なる。なぜなら、中国語では、能動文を作る際に、動作主志向の傾向が強く、忠実に出来事の流れを描くことが好まれることが考えられる。また、受動文の生起条件も日本語とは違い、動作の受け手に起こった変化に注目する場合と、ウチでないほうがすでに話題の中心に据えられている場面では、「私」が優先されずに、ウチでないほうが主語になりうる。

5章は視点制約が最も強いと思われる話し言葉に注目し、日本語母語話者の自然会話のデータを収録した名大会話コーパスを用い、視点制約理論の妥当性を探った。考察にはスポーツ記事と同じく、1人称が主語になっているかどうかを調べる手法を取った。その結果は基本的にスポーツ記事と同様で、1人称を主語にした文がほとんどで、非1人称を主語にした

能動文は約 15%しか観察されなかった。さらに、非 1 人称を主語にした受動文は 4 例観察されたが、それは主節ではなく、すべて従属節に生起していた。ゆえに、視点制約理論が話し言葉にも基本的にあてはまると考えられた。一方、非 1 人称を主語にした文の生起動機は、受動文は 4 例しかないため、張 (1995) の「従属節で生起しやすい」と、対比という 2 つの主張で説明がつき、能動文は主に対比、主題の連鎖などの理由が考えられた。

6 章は 3 人称小説に目を向け、1 人の人物だけに視点を寄せて、その人物に完全に自己同一化すると思われる小説(「限定の視点」型の小説)における視点制約の働き方を考察した。本研究は西郷 (1975) に従い、3 人称小説を主に「客観の視点」(「登場するすべての人物を外がわから客観的に描く」もの)、「限定の視点」(「幾人かの登場人物の中のある特定の人物の視点とかさなる」もの)、「全知の視点」(「すべての人物を外からとらえながら、かつすべての人物の視点に同時に立つことができる」もの)の 3 種類に分けた。このうち、「限定の視点」型と思われる小説では、視点制約理論が働く可能性が高いと想定した。この小説をスポーツ記事や話し言葉と同じ手法で考察した結果、メインの登場人物でないほうを主語にした受動文はほとんど見られなかった。また、非メイン人物を主語にした能動文が比較的高い割合を占めていた。この結果から、「限定の視点」型の小説は、視点の制約がほかの種類より強く働くが、スポーツ記事や話し言葉より緩いと考えられた。一方、非メイン人物を主語にした文の使用は主題の連鎖、小説の特殊な話法などの動機に基づいていると考えられた。同時に、小説で、メイン人物でないほうを主語にした文はスポーツ記事、話し言葉より多く見られたことは、視点が義務的に寄る状況とその規制がさほど厳しくない状況における差によるものであると考えられた。

第 3 部：まとめ (7、8 章)

第 3 部は、本研究の結論を提示した。

7 章は 4、5、6 章の分析を踏まえて、スポーツ記事、話し言葉、「限定の視点」型の小説の結果を統括的に分析した。この 3 つの場面において、視点制約の強弱は、「話し言葉>スポーツ記事>「限定の視点」型の小説」という順番になっていると言えた。また、日本語は基本的に視点制約理論に従っていると言えるが、この理論は常に働くわけではなく、破られる場合があると考えた。受動文の場合では、ウチでないほうを主語にした文が従属節では比較的成立しやすい。また、能動文の場合、三項動詞、「殴る」のような他動性の高い動詞の動詞文では、ウチでないほうが比較的主語になりやすいと見られた。8 章は 1-7 章の構成を概観し、本研究で得た成果と残された課題を提示した。

3 章の 2 つのリサーチクエスチョンに対する本研究の答え(結論)は以下のとおりである。

- a) 視点制約理論は基本的に日本語に適応すると考えられる。ただし、ウチでない人物を主語にした能動文が少ないながらも見られたため、視点制約は常に守られているわけではない。本研究は視点制約理論に対して以下の項目を付け加え、その位置づけをさらに明

確にする。

久野（1978）の視点制約理論により、文を作る際に、基本的にウチを文の主語に据えることが原則になっている。ただし、ウチが動作の与え手であるとき、必ずそれを主語にすることが厳しく要求されるが、ウチが動作の受け手となる場合、ウチでないほうを主語にして、ウチを「ヲ」格でマークすることに対しては、規制がやや緩くなるのではないかと考えられる。

- b) 視点制約理論は中国語には適応しないため、言語普遍性を持っていないと考えたほうがよい。その理由は、中国語では、そもそも能動文と受動文の生起条件が日本語と異なるため、主語の選択に関して、ウチとウチでないほうの間に基本的にランキングが存在しないためである。

参考文献：

大江三郎（1975）『日英語の比較研究——主観性をめぐって』南雲堂

久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店

西郷竹彦（1975）『西郷竹彦文芸教育著作集 17 文芸学講座（1）視点・形象・構造』明治図書出版

張麟声（1995）「能動文受動文選択に見られる一人称の振舞い方について」『日本学報』第14号 pp.95-106.

張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析——中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク